

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K13151

研究課題名（和文）対話を通じた共生のための価値観の形成をもたらす音楽科カリキュラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Music Curriculum that Promotes the Formation of Values for Coexistence through Dialogue

研究代表者

小山 英恵 (KOYAMA, Hanae)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：20713431

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主に異文化間音楽教育に関するドイツの音楽教育の理論と実践について明らかにし、それらをふまえながら対話を通じた共生のための価値観の形成をもたらす日本の音楽科教育の在り方について検討した。研究の成果として、音楽科教育において音楽作品の多様性だけでなく音楽を営む人々にとっての意味や価値の多様性に着目すること、および多様な音楽文化が行き交う現代社会において子どもたち各自が音楽とのかかわり方をみつけ創り出していくために、音楽科教育が、美的な対話を通して自己、他者、音楽世界の新たな認識をひらきながら、子ども一人ひとりの自由でひらかれた音楽文化的アイデンティティ形成を促すことが展望された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、対話を通じた共生のための価値観の形成をもたらすために、これまでの音楽科教育に2つの転換をもたらす展望を示したことにある。第一に、これまで異文化理解というと音楽作品の多様性に目が向けられがちであった授業に、人々にとっての音楽の意味や多様性への着目を新たにもたらし点である。第二に、二項対立を生みやすい自文化（日本の伝統音楽）、異文化（諸外国の音楽）を子どもに「与える」スタンスから、多様な他者との対話を通して人々にとっての音楽の意味の多様性を知りながら、子どもたちが自分にとっての音楽の意味を深め、自由でひらかれた音楽文化的アイデンティティを形成していくというスタンスへの転換である。

研究成果の概要（英文）： This study clarified the theory and practice of music education in Germany, mainly regarding intercultural music education, and examined how music education in Japan should promote the formation of values for coexistence through dialogue, based on these findings. The results obtained the following two perspectives. First, it is important to address not only the diversity of musical works but also the diversity of meanings and values of music for people in music education. Second, in order for each child to find and create his or her own way of relating to music in today's society, where diverse musical cultures come and go, music education is expected to promote the formation of a free and open musical cultural identity for each child, while opening a new awareness of self, others, and the musical world through aesthetic dialogue.

研究分野：教育学

キーワード：異文化間音楽教育 対話 共生 D.バルト C.ヴァルバウム 音楽文化的アイデンティティ 意味志向の文化概念 ドイツ

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化と技術革新が加速するなかで、多様な文化的背景をもつ人々の共生は避けられない現実となっている。2017年3月に改訂された学習指導要領の芸術系教科においては、グローバル化が益々進展するなかで、多様な音楽文化の理解を通して自己のアイデンティティを確立することや「自分とは異なる文化的背景や歴史的背景をもつ音楽を大切にし、多様性を理解すること」(文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』2017年) また、「異なる文化や歴史に敬意を払い、人々と共存してよりよい社会を形成していこうとするための教育を一層充実する必要」が強調されており(文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』2017年) 様々な芸術文化の内容の理解にとどまらず、それらの文化が本質的には芸術の領域を超えた人間の営みであることを理解し、多様な他者と共生するなかでよりよい社会を形成していこうとするような価値観を育成することが求められている。また、そのような資質・能力を教科における深い学びを通して育成するために、教科の本質にせまる主体的で対話的な学びのあり方を明らかにすることも課題となっている。このような状況に鑑み、本研究の「問い」は、「様々な音楽文化の理解が、その本質的理解を通して、単にそれらの内容的な理解に留まらず、多様な他者との共生に向けた価値観の形成をもたらすような主体的で対話的な学びのあり方とはどのようなものか?」という点にあった。

## 2. 研究の目的

このような問いのもとで、本研究では、音楽の営みの本質を、自己や他者や世界と対話しながら様々な音楽文化との心からの理解を目指して価値判断を深めていくプロセスとして捉えるドイツの音楽教育論に着目した。そのうえで、本研究の目的は、音楽の営みの本質に人間の生の営みと価値観の深まりをみるドイツの音楽教育論について、および教室における対話の理論について検討し、その特色を明らかにしたうえで、自己と自己との対話、自己と他者との対話、自己と世界との対話を通して共生のための価値観の形成をもたらす音楽科のカリキュラムを開発することであった。

## 3. 研究の方法

研究開始当初の研究計画では、文献調査およびドイツでの授業・インタビュー調査を通じた共生のための価値観の形成をもたらす音楽教育に関する理論構築(目標、教材、学習活動、評価、教師の役割のあり方についての説明) 音楽教育における共生のための価値観の形成をもたらす対話のあり方について理論構築、およびアクション・リサーチによる対話を通じた共生のための価値観の形成をもたらす音楽科カリキュラムの開発を進める予定であった。しかしながら、世界的な感染症の拡大により、ドイツでの調査や日本の学校現場でのアクション・リサーチを実施することが困難となったため、文献調査により、本研究課題についてより多角的かつ幅広い視野から研究を進めることとなった。具体的には、ドイツの音楽教育(とくに異文化間音楽教育に関する主張)の理論および実践についてより詳細に明らかにし、今後の日本における音楽科教育の示唆を得ること、およびその成果をふまえながら対話を通じた共生のための価値観の形成をもたらす日本の音楽科教育の在り方に関して検討し展望を示すことを目指した。

## 4. 研究成果

本研究の成果は、主に下記の2つの領域から成る。

### (1) ドイツの異文化間音楽教育に関する研究の成果

ドイツでは1970年代に、第二次世界大戦後の政策に関わって外国人労働者(Gastarbeiter)の子どもの教育問題が浮上する。以降、異文化間(音楽)教育の在り方が追求されてきた。

#### D. バルトによる異文化間音楽教育に関する主張の検討

本研究が着目したのは第一に、21世紀に入りそれまでのドイツにおける異文化間音楽教育を転換する視点をもたらしたD.バルトの主張である。ドイツにおいて1980年代に成立し今日の学校教育にも影響を与えている異文化間音楽教育のあり方を、バルトの主張がどのように転換させるのか、その意義を明らかにした。バルトは、これまでの異文化間音楽教育が民族的全体論的な文化概念を基盤とし、そのことによって「私たち」と「彼ら」の二項対立の問題を引き起こしていることを批判する。そのうえで、ギアーツの文化解釈学に依拠して、異文化間音楽教育が意味志向の文化概念を基盤とすることを主張する。意味志向の文化概念を基盤とすることによって、異文化間音楽教育はその焦点を、音楽理解から人々の認識の仕方の理解へと移し、人々の音楽実践への意味付与の探究に目を向ける。また、意味志向の文化概念に基づけば、民族や国籍や地域に関係なく、意味付与を共有しているときに人々は同じ文化に所属していると捉えられる。このことを前提として、祖国の伝統音楽を自文化とせずに関われた音楽文化的アイデンティティの形成を支えることによって、「私たち」と「彼ら」の二項対立を克服する。これらの点に

において、バルトの主張が従来の異文化間音楽教育を転換させることを明らかにした。また、このような意味志向の文化概念に基づく異文化間音楽教育のプロセスが、音楽学の内容も一つの意味付与として相対化しつつ、自己、他者、音楽世界の新たな認識をひらく点に意義を見出した。

### C. ヴァルバウムによる異文化間音楽教育に関する音楽教授学の検討

本研究がドイツの異文化間音楽教育に関わって第二に着目したのは、意味志向の文化概念を基盤とする音楽教育の立場に立ち、異文化間音楽教育の意義を内包する音楽教授学の理論を提唱しており、かつ対話を通じた具体的な授業場面を含む実践的研究を行っている C. ヴァルバウムの主張である。まず、ヴァルバウムによる音楽教授学の理論的全景を明らかにした。ヴァルバウムは、主体の関心と客体の性質が適合するとき生じる「心を満たす」瞬間を核とする音楽的実践に着目し、「心を満たす」音楽作品の創作活動を中心とする教授学のモデル「プロセス - プロダクト - 教授学 (Prozess-Produkt-Didaktik)」を提唱している。それは、美的知覚と美的対話において、M.ゼールの現象学的 解釈学的美学に基づく照応的美的实践、想像的美的实践、観照的美的实践の3つを活発にさせることによって、「正しさ」ではなく「心を満たす」魅力を規準とする美的批判と、自己や世界のコンセプトの組み換えを子どもたちにもたらし、またヴァルバウムは、「プロセス - プロダクト - 教授学」の拡張版である「音楽実践の経験と比較 (Musikpraxen erfahren und vergleichen)」を提唱している。これは「プロセス - プロダクト - 教授学」を基本として、普通教育学校の期間に複数の一連の音楽実践を経験し、比較することを提案するものであり、異文化間音楽教育として複数の音楽的 美的実践の経験と比較を通して今日の越境文化的な生活状況における音楽的 美的実践を子どもたちにひらく。このようなヴァルバウムの音楽教授学は、ドイツの音楽教育研究の歴史においてみられる客体志向の音楽教育に象徴されるような芸術作品を音楽学的に正しく理解する学習とは一線を画し、同時に主体志向の音楽教育において批判されたような音楽活動の質を不問にするという問題も克服する。

次に、ヴァルバウムによる異文化間音楽教育の具体的な授業の在り方について検討した。ヴァルバウムによる異文化間音楽教育の授業は、客体としての音楽文化の多様性よりむしろ、人々にとっての音楽の意味の多様性に目を向けるものである。この授業は、自らの音楽知覚の方法から距離を取り美的な自由を獲得する機会を提供する。その方法は自分にとってなじみのない音楽に魅力を感じている他者の音楽知覚の方法を追体験させることで新たな知覚の方法をひらくものである。また、多様な他者の音楽知覚の方法の理解を通して、多様な文化的背景をもつ他者との共生へ導く点にこの教育の意義を見出した。

また、ヴァルバウムの音楽教授学に影響を与えている C. ロレの主張についても研究を進めた。

## (2) 多様な文化的背景をもつ他者との共生をめざす音楽科教育に関する研究

本研究におけるもう1つの研究領域は、日本の学校における音楽科教育に焦点をあてるものである。

### 多様な文化的背景をもつ他者との共生に向けた音楽鑑賞教育に関する研究

この研究では、現在の音楽科における多様な文化的背景をもつ他者との共生に向けた鑑賞の学習が、一方で自文化 他文化の二項対立、固定的な文化観、あらゆる音楽文化に等価値性をみることを前提とする点で文化相対主義に、他方で音楽に内在する美としてのフォルム理解の理論を背景にするという点において、何かしらの真理(本体)を求める本体論に陥っているという、ダブルバインドの状態にあることを指摘した。この問題を解決するために、竹田青嗣の提唱する欲望論における芸術についての洞察を適用し、音楽鑑賞の核心を感動や感銘といった音楽作品に心を動かされる体験におくこと、およびその体験について語り合うテーブルとしての対話を共生の実践それ自体として実施する展望を示した。

### 対話を通じた音楽学習の深まりに関する研究

2017年改訂学習指導要領をふまえた音楽科の深い学びをもたらし学習に資するものとして、ドイツにおける対話的な人間形成の考えを基盤として、パフォーマンス課題を活用して子どもたちが多様な音楽文化や他者や自己と対話しながら音楽表現や鑑賞の学習を深めていくあり方を提示した。

### 【主たる引用文献】

- ・小山英恵「第6章 初等音楽科の評価」笹野恵理子編『はじめて学ぶ教科教育 初等音楽科教育』ミネルヴァ書房、2018年。
- ・小山英恵「第6章 音楽科」「第8章 美術科」西岡加名恵・石井英真編著『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価 「見方・考え方」をどう育てるか』日本標準、2019年。
- ・小山英恵「共生をめざす音楽教育 文化の変容と創出を営む学習へ」李修京編著『多文化共

生社会に生きる グローバル時代の多様性・人権・教育』明石書店、2019年。

・小山英恵「D.バルトの異文化間音楽教育 意味志向の文化概念を基盤とすることの意義」『教育学研究』第88巻第1号、2021年、pp.14-26。

・小山英恵「多様な文化的背景をもつ他者との共生に向けた音楽科における鑑賞の学習に関する考察 欲望論における芸術洞察の適用」『本質学研究』第10号、2022年、pp.28-43。

・小山英恵「C.ヴァルバウムの「心を満たす」音楽的-美的実践を核とする音楽教授学 主体志向と客体志向の対立をどう克服するか」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第73号、2022年、pp.39 - 51。

・小山英恵「C.ヴァルバウムによる新たな知覚の方法をひらく異文化間音楽教育 人々にとっての音楽の意味の多様性に目を向ける授業の意義」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第74号、2023年、pp.38-49。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小山英恵	4. 巻 74
2. 論文標題 C.ヴァルバウムによる新たな知覚の方法をひらく異文化間音楽教育 人々にとっての音楽の意味の多様性に目を向ける授業の意義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 38-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小山英恵	4. 巻 10
2. 論文標題 多様な文化的背景をもつ他者との共生に向けた音楽科における鑑賞の学習に関する考察 欲望論における芸術洞察の適用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 本質学研究 ( <a href="https://wesenswissenschaft.wordpress.com">https://wesenswissenschaft.wordpress.com</a> )	6. 最初と最後の頁 28 - 43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 小山英恵	4. 巻 73
2. 論文標題 C.ヴァルバウムの「心を満たす」音楽的-美的実践を核とする音楽教授学 主体志向と客体志向の対立をどう克服するか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京学芸大学紀要 総合教育科学系	6. 最初と最後の頁 39 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小山英恵	4. 巻 88（1）
2. 論文標題 D.バルトの異文化間音楽教育 意味志向の文化概念を基盤とすることの意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育学研究	6. 最初と最後の頁 14 - 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小山英恵
2. 発表標題 音楽科の授業において美的人間形成は可能か モレンハウアーの挑発に対するロレの提案
3. 学会等名 日本音楽教育学会第53回大会 研究発表 国立音楽大学（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山英恵
2. 発表標題 音楽科における「心を満たす」美的実践 「RED」に焦点をあてた授業の検討
3. 学会等名 第53回日本音楽教育学会大会 話題提供 共同企画「音楽科教育の実践研究を問い直す（2）」国立音楽大学（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山英恵
2. 発表標題 Wallbaumの「心を満たす」音楽的 美的実践を核とする音楽教授学 主体志向と客体志向の対立をどう克服するか
3. 学会等名 第52回日本音楽教育学会大会 研究発表 京都教育大学（オンライン大会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小山英恵
2. 発表標題 ドイツにおける異文化間音楽教育の展開 D.Barthによる意味指向の文化概念に焦点をあてて
3. 学会等名 第50回日本音楽教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小山英恵
2. 発表標題 共生をめざす学校教育における音楽鑑賞に関する考察 現象学的 欲望論的芸術論を基底として
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 小山英恵「Column 芸術系教科の評価で大切なことは何ですか？」	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 289
3. 書名 岡加名恵・石井英真・田中耕治編著『新しい教育評価入門 人を育てる評価のために〔増補版〕』	

1. 著者名 小山英恵「音楽科における評価」	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 262
3. 書名 西岡加名恵・石井英真編著『教育評価重要用語事典』	

1. 著者名 小山英恵「共生をめざす音楽教育 文化の変容と創出を営む学習へ」	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 346
3. 書名 李修京編著『多文化共生社会に生きる グローバル時代の多様性・人権・教育』	

1. 著者名 小山英恵「4 - 2 授業における音楽の学び 2 評価研究」	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 248
3. 書名 日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』	

1. 著者名 小山英恵「初等音楽科の評価」	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 235
3. 書名 笹野恵理子編『はじめて学ぶ教科教育 初等音楽科教育』	

1. 著者名 小山英恵「音楽科」「美術科」	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本標準	5. 総ページ数 149
3. 書名 西岡加名恵・石井英真編著『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価 「見方・考え方」をどう育てるか』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------